



TITLE:

Subdifferentialの発展方程式について (発展系と自由境界問題)

AUTHOR(S):

山田, 義雄

CITATION:

山田, 義雄. Subdifferentialの発展方程式について (発展系と自由境界問題). 数理解析研究所講究録 1976, 264: 176-192

ISSUE DATE:

1976-02

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/105832>

RIGHT:

Subdifferential の発展方程式について

東大 理学部 山田義雄

§1. 序

本講演では、実 Hilbert 空間 H において、次の型の非線型発展方程式を考える。

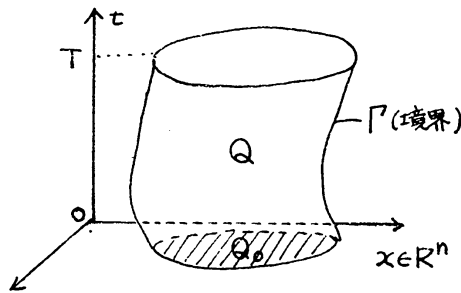
$$(E) \quad \frac{d}{dt} u(t) + \partial \varphi^t(u(t)) \ni f(t), \quad 0 \leq t \leq T.$$

ここで、各 $t \in [0, T]$ に対して、 $\varphi^t: H \rightarrow (-\infty, +\infty]$ ($\varphi^t \neq +\infty$) は下半連続な凸関数で、 $\partial \varphi^t$ はその subdifferential とする。

この型の方程式は、最初、Brezis [4] によって、 $\varphi^t = \varphi$ が t に無関係な場合を取り扱われ、(E) の解の滑らかさを含めて様々の結果が得られた。その後、 φ^t が t に依存する場合には、特に、 $D(\varphi^t) = \{u \in H; \varphi^t(u) < +\infty\}$ が t に無関係であることを仮定して、Watanabe [13], Attouch-Damlamian [2], Maruo [10] らによって Brezis の結果が拡張された。さらに、 $D(\varphi^t)$ が t に依存する場合も、方程式 (E) は多くの人々によって取り扱われ、種々の結果が得られている。(Attouch-Benilan-Damlamian-Picard [1],

Biroli [3], Brezis [5], Kenmochi [8], Kenmochi-Nagai [9], Moreau [11], Peralba [12] 等)

我々が、方程式(E)において問題とするのは、一般に、 $D(\varphi^t)$ が t に依存する場合であり、特に、境界が時間的に変化する、次のような非線型問題



$$\begin{cases} \frac{\partial u}{\partial t} - \sum_{i=1}^n \frac{\partial}{\partial x_i} \left(\left| \frac{\partial u}{\partial x_i} \right|^{p-2} \frac{\partial u}{\partial x_i} \right) = f & \text{on } Q \\ u = 0 & \text{on } \Gamma \\ u(x, 0) = u_0(x) & \text{on } Q_0 \end{cases}$$

にも応用できるようにすることを目的とする。

さて、ここで、 H 上の下半連続な凸関数の族 $\{\varphi^t\}_{0 \leq t \leq T}$ に関する仮定を述べよう。

仮定 A. $r > 0$, $t_0 \in [0, T]$ とする。このとき、各 $x_0 \in D(\varphi^{t_0})$, $\|x_0\| \leq r$, に対して、次を満たす $x: [0, T] \rightarrow H$ が存在する。

$$(i) \quad \|x(t) - x_0\| \leq |g_r(t) - g_r(t_0)| (\varphi^{t_0}(x_0) + K_r)^{\frac{1}{2}}, \quad 0 \leq t \leq T.$$

$$(ii) \quad \varphi^t(x(t)) \leq \varphi^{t_0}(x_0) + |h_r(t) - h_r(t_0)| (\varphi^{t_0}(x_0) + K_r), \quad 0 \leq t \leq T.$$

但し、 K_r は正定数、 g_r, h_r は $[0, T]$ 上の絶対連続関数で、 $g_r \in L^2(0, T)$ を満たす。

定義. $u: [0, T] \rightarrow H$ が、(E) の強い解であるとは、

(i) $u \in C([0, T]; H)$. (ii) $(0, T)$ の任意の compact 集合上、 u は強

絶対連続. (iii) a.e. $t \in (0, T)$ で, $u(t) \in D(\partial\varphi^t)$, かつ,

$$\frac{d}{dt}u(t) + \partial\varphi^t(u(t)) \ni f(t).$$

を満たすことをいう.

以上の仮定, 定義の下で, 次の定理が成立する.

定理. $a \in \overline{D(\varphi^0)}$, $f \in L^2(0, T; H)$ とする. このとき, (E)の強い解 u で, $u(0) = a$ となるものが一意に存在し, しかも, 次の性質をもつ.

(i) すべての $t \in (0, T]$ について, $u(t) \in D(\varphi^t)$ であり, $\varphi^t(u(t)) \in L^1(0, T)$, かつ, $t\varphi^t(u(t)) \in L^\infty(0, T)$ である. さらに, 任意の $\delta > 0$ に対して, $\varphi^t(u(t))$ は, $[\delta, T]$ 上絶対連続である.

(ii) $t^{\frac{1}{2}} du/dt \in L^2(0, T; H)$.

特に, $a \in D(\varphi^0)$ ならば, u は (i), (ii) の代わりに, 次を満たす.

(i') すべての $t \in [0, T]$ について, $u(t) \in D(\varphi^t)$ であり, $\varphi^t(u(t))$ は, $[0, T]$ 上, 絶対連続である.

(ii') u は $[0, T]$ 上, 強絶対連続, かつ, $du/dt \in L^2(0, T; H)$.

注意 1. 仮定 A は, $D(\varphi^t) = D$ が t に依存しない場合の, [2], [13] の仮定の一般化になっている.

注意 2. Kenmochi [8] は, 仮定 A を少し弱めて, 方程式 (E) を変分不等式の形で取り扱い, 'semi-discretisation 法' によって,

上記定理より、いくつか弱い結果を導いた。

§2. 準備

この節では、凸関数に関する即知の結果をいくつか述べるが、詳しい証明は、[6], [13]等を参照していただきたい。

$\varphi: H \rightarrow (-\infty, +\infty]$ ($\varphi \not\equiv +\infty$) を下半連続な凸関数であるとし、

$$D(\varphi) = \{u \in H; \varphi(u) < +\infty\}$$

とおく。各 $u \in D(\varphi)$ に対して、集合

$$\partial\varphi(u) = \{w \in H; \varphi(v) - \varphi(u) \geq (w, v - u), \forall v \in D(\varphi)\}$$

を、 φ の u における subdifferential と言い、 $\partial\varphi$ の定義域 $D(\partial\varphi)$ と、 $D(\partial\varphi) = \{u \in D(\varphi); \partial\varphi(u) \neq \emptyset\}$ で定義する。このとき、 $\partial\varphi$ は H における極大単調作用素であり、 $\overline{D(\varphi)} = \overline{D(\partial\varphi)}$ となることはよく知られている。よって、 $\lambda > 0, u \in H$ に対して、 $J_\lambda u \equiv (I + \lambda \partial\varphi)^{-1}u$ は意味を持つ。

— 又、 $\lambda > 0, u \in H$ に対して、

$$(2.1) \quad \varphi_\lambda(u) = \inf_{v \in H} \left\{ \varphi(v) + \frac{1}{2\lambda} \|u - v\|^2 \right\}$$

によって φ_λ を定義すれば、(2.1) の \inf は $J_\lambda u$ で達成されることが知られている。従って、(2.1) より、

$$(2.2) \quad \varphi(u) \geq \varphi_\lambda(u) = \varphi(J_\lambda u) + \frac{1}{2\lambda} \|u - J_\lambda u\|^2 \geq \varphi(J_\lambda u)$$

$$(2.3) \quad \varphi(v) - \varphi(J_\lambda u) \geq \lambda^{-1}(u - J_\lambda u, v - J_\lambda u), \quad \forall v \in D(\varphi)$$

が成立する. さらに, φ_λ は Fréchet 微分可能な凸関数で, その Fréchet 微分 $\partial\varphi_\lambda$ は $\partial\varphi$ の Yosida 近似 ($\partial\varphi_\lambda = \lambda^{-1}(I - J_\lambda)$) に一致することが知られている. より詳しく述べれば,

$$(2.4) \quad 0 \leq \varphi_\lambda(v) - \varphi_\lambda(u) - \frac{1}{\lambda}(u - J_\lambda u, v - u) \leq \frac{1}{\lambda}\|u - v\|^2, \quad \forall u, v \in H$$

が成立する. よって, 今後, $(\partial\varphi)_\lambda$ の代わりに, $\partial\varphi_\lambda$ で表わすことにする. 最後に, (2.2) より, 任意の $u \in H$ について,

$$(2.5) \quad \lim_{\lambda \downarrow 0} \varphi_\lambda(u) = \varphi(u)$$

が成立することを注意しておく.

§3. 補題.

定理の証明に入る前に, 必要な補題をいくつか述べる.

補題 3.1. 仮定 A の下で, ある正定数 C_1, C_2 が存在して,

$$(3.1) \quad \varphi^t(x) + C_1\|x\| + C_2 \geq 0$$

が $\forall t \in [0, T], \forall x \in H$ に対して成立する.

[証明] 最初に, $v_0 \in D(\varphi^0)$ を固定すれば, 仮定 A より, $[0, T]$ 上の H -値関数 v で, $v(0) = v_0$, かつ, $\forall t \in [0, T]$ において

$$(3.2) \quad \|v(t)\| \leq r_0 - 1, \quad \varphi^t(v(t)) \leq M_0$$

となるものが存在することに注意する. 但し, r_0, M_0 は正定数. 一斉, 仮定 A において, g_{r_0}, h_{r_0} が共に定数関数になるこ

とは有りとしてかまわないから、仮定 A より, $x \in H, \|x\| \leq r_0$ のとき,

$$\varphi^t(x) + Kr_0 \geq 0, \quad \forall t \in [0, T]$$

となることがわかる. 他方, $\|x\| \geq r_0$ のとき, $\alpha(t) = \|x - v(t)\|^{-1}$, $u(t) = \alpha(t)x + (1 - \alpha(t))v(t)$ とおけば, $0 < \alpha(t) \leq 1$, $\|u(t)\| \leq r_0$ であるから,

$$\alpha(t)\varphi^t(x) + (1 - \alpha(t))\varphi^t(v(t)) \geq \varphi^t(u(t)) \geq -Kr_0, \quad \forall t \in [0, T]$$

を得る. この不等式と (3.2) より (3.1) を得る. (証明終)

補題 3.2. (cf. Kenmochi [8, lemma 3.3 及びその系]) 仮定 A の下で, 正定数 δ, r_0, M を適当に選べば, 各 $t \in [0, T]$ に対して, $[t, \min\{t + \delta, T\}]$ 上の強絶対連続関数 v_t を

$$\|v_t(s)\| \leq r_0, \quad \varphi^s(v_t(s)) \leq M, \quad \forall s \in [t, \min\{t + \delta, T\}]$$

を満たすように構成することが出来る.

[証明] [8]における方法を利用する. $v_0 \in D(\varphi)$ を固定し, 仮定 A を用いて, (3.2) を満たす $v: [0, T] \rightarrow H$ をとる. 次に,

$$(3.3) \quad M = \exp\left(\int_0^T |h'_{r_0}(t)| dt\right) (M_0 + Kr_0 \int_0^T |h'_{r_0}(t)| dt)$$

とおき, δ を次で定義する.

$$(3.4) \quad \delta = \left(\int_0^T |g'_{r_0}(t)|^2 dt\right)^{-1} (M + Kr_0)^{-1}.$$

強絶対連続関数を構成するため, 任意の $t_0 \in [0, T]$ をとり固定する. (便宜上, $t_0 \leq T - \delta$ とする.) 次に, $\varepsilon_n = \frac{\delta}{n}$ とおき, 点列 $\{u_n^k\}_{k=0}^n$ ($\|u_n^k\| \leq r_0$, $u_n^k \in D(\varphi^{t_0 + k\varepsilon_n})$, $k=0, 1, \dots, n$) を, $u_n^0 = v(t_0)$ から始めて, u_n^{k-1} に対して仮定 A を用い, 順次, u_n^k を,

$$(3.5) \quad \|u_n^k - u_n^{k-1}\| \leq |g_{r_0}(t_0 + k\varepsilon_n) - g_{r_0}(t_0 + (k-1)\varepsilon_n)| (\varphi^{t_0 + (k-1)\varepsilon_n}(u_n^{k-1}) + K_{r_0})^{\frac{1}{2}},$$

$$(3.6) \quad \begin{aligned} \varphi^{t_0 + k\varepsilon_n}(u_n^k) &\leq \varphi^{t_0 + (k-1)\varepsilon_n}(u_n^{k-1}) + |h_{r_0}(t_0 + k\varepsilon_n) - h_{r_0}(t_0 + (k-1)\varepsilon_n)| \times \\ &\times (\varphi^{t_0 + (k-1)\varepsilon_n}(u_n^{k-1}) + K_{r_0}), \end{aligned}$$

を適たすように選ぶ。実際、上のように $\{u_n^k\}$ を構成できるこ

とは、(3.3), (3.4) に注意すればわかる。又、

$$(3.7) \quad \|u_n^k - v(t_0)\| \leq 1, \quad \varphi^{t_0 + k\varepsilon_n}(u_n^k) \leq M, \quad k=0, 1, \dots, n,$$

が成立することも同時に導かれる。

次に、 $[t_0, t_0 + \delta]$ 上の強絶対連続関数 u_n を

$$(3.8) \quad u_n(t) = \frac{t_0 + i\varepsilon_n - t}{\varepsilon_n} u_n^{i-1} + \frac{t - (t_0 + (i-1)\varepsilon_n)}{\varepsilon_n} u_n^i, \quad \text{if } t \in [t_0 + (i-1)\varepsilon_n, t_0 + i\varepsilon_n]$$

によって定義すれば、(3.2), (3.5), (3.7), (3.8) より、 u_n は

$$(3.9) \quad \|u_n(t)\| \leq r_0, \quad t_0 \leq t \leq t_0 + \delta,$$

$$(3.10) \quad \|u_n(t) - u_n(s)\| \leq (M + K_{r_0})^{\frac{1}{2}} \int_{s-\varepsilon_n}^{t+\varepsilon_n} |g_{r_0}'(\tau)| d\tau, \quad t_0 \leq s \leq t \leq t_0 + \delta,$$

$$(3.11) \quad \int_{t_0}^{t_0 + \delta} \|u_n'(t)\|^2 dt \leq (M + K_{r_0}) \int_{t_0}^{t_0 + \delta} |g_{r_0}'(t)|^2 dt,$$

を適たす。(3.9), (3.11) より $\{u_n\}, \{u_n'\}$ は共に $L^2(t_0, t_0 + \delta; H)$ の有界集合であるから、 $\{u_n\}$ の適当な部分列 $\{u_{n'}\}$ をとれば、 $u_{n'}, u_{n'}$ はある u, u' に共に $L^2(t_0, t_0 + \delta; H)$ で弱収束し、さらに、各点 $t \in [t_0, t_0 + \delta]$ で、 $u_{n'}(t)$ は $u(t)$ に弱収束するようにできる。簡単のため、この部分列 $\{u_{n'}\}$ も $\{u_n\}$ で表わす。ここで、各 $t \in [t_0, t_0 + \delta]$ を

固定して, $t_n = t_0 + [\frac{t-t_0}{\varepsilon_n}] \varepsilon_n$ ($[\cdot]$ は Gauss 記号) とおく. (3.7) より,

$\varphi^{t_n}(u_n(t_n)) \leq M$ であるから, 仮定 A より, $\hat{u}_n \in D(\varphi^t)$ へ,

$$\|\hat{u}_n - u_n(t_n)\| \leq |g_{r_0}(t) - g_{r_0}(t_n)| (M + K_{r_0})^{\frac{1}{2}},$$

$$\varphi^t(\hat{u}_n) \leq \varphi^{t_n}(u_n(t_n)) + |h_{r_0}(t) - h_{r_0}(t_n)| (M + K_{r_0}),$$

を満たすようにとれる. 一方, $w\text{-}\lim_{n \rightarrow \infty} \hat{u}_n = u(t)$ より,

$$\varphi^t(u(t)) \leq \liminf_{n \rightarrow \infty} \varphi^t(\hat{u}_n) \leq \liminf_{n \rightarrow \infty} \varphi^{t_n}(u_n(t_n)) \leq M, \quad t \in [t_0, t_0 + \delta].$$

最後に, u の強絶対連続性を示す. そのために, Mazur の定理を適用すれば, $\{u_n\}$ の適当な凸線型結合

$$v_n = \sum_{i=0}^{j_n} \alpha_n^i u_{n+i}, \quad \alpha_n^i \geq 0, \quad \sum_{i=0}^{j_n} \alpha_n^i = 1,$$

をとることによって, $n \rightarrow \infty$ のとき, v_n は u に, v_n' は u' に, それぞれ $C([t_0, t_0 + \delta]; H)$, $L^2(t_0, t_0 + \delta; H)$ で強収束するようにできるとに注意する. 一方, (3.10) より, $t_0 \leq s \leq t \leq t_0 + \delta$ において

$$\|v_n(t) - v_n(s)\| \leq (M + K_{r_0})^{\frac{1}{2}} \int_{s-\varepsilon_n}^{t+\varepsilon_n} |g_{r_0}'(\tau)| d\tau$$

が成立するから, $n \rightarrow \infty$ として, u の強絶対連続性がわかる.

$t_0 \in [0, T]$ は任意であったから, (3.2), (3.3), (3.4) で r_0, M, δ を決めれば, 補題の主張の正しいことがわかる. (証明終)

ここで, $\lambda > 0$, $x \in H$ に対して, $J_\lambda^t x = (I + \lambda \partial \varphi^t)^{-1} x$, $\varphi_\lambda^t(x) = \varphi^t(J_\lambda^t x) + \frac{1}{2\lambda} \|x - J_\lambda^t x\|^2$ とおけば, 次の補題を得る.

補題 3.3. $\lambda > 0$, $x \in H$ とする. このとき, 仮定 A の下で,

(i) $J_\lambda^t x$ は $0 \leq t \leq T$ について強連続, かつ, ある正定数 C_3 が

存在して

$$(3.12) \quad \|J_\lambda^t x\| \leq 2\|x\| + C_3$$

が, $\forall x \in H, 0 < \lambda \leq 1, 0 \leq t \leq T$ に対して成立する.

(ii) $\varphi_\lambda^t(x)$ は $0 \leq t \leq T$ について絶対連続, かつ, $0 \leq s \leq t \leq T$ において

$$(3.13) \quad \begin{aligned} |\varphi_\lambda^t(x) - \varphi_\lambda^s(x)| &\leq |h_r(t) - h_r(s)| [\max\{\varphi_\lambda^t(x), \varphi_\lambda^s(x)\} + K_r] \\ &\quad + |g_r(t) - g_r(s)| [\max\{\|\partial\varphi_\lambda^t(x)\|, \|\partial\varphi_\lambda^s(x)\|\}][\max\{\varphi_\lambda^t(x), \varphi_\lambda^s(x)\} + K_r]^{\frac{1}{2}} \end{aligned}$$

が成立する. 但し, $r = \sup\{\|J_\lambda^t x\|; 0 < \lambda \leq 1, 0 \leq t \leq T\}$.

[証明] $0 < \lambda \leq 1, x \in H$ を固定する. φ_λ^t の定義 (2.1) と (2.3) より,

$$(3.14) \quad \varphi^t(v) + \frac{1}{2\lambda} \|x - v\|^2 \geq \varphi_\lambda^t(x), \quad \forall v \in H,$$

$$(3.15) \quad \varphi^t(v) - \varphi^t(J_\lambda^t x) \geq \lambda^{-1} (x - J_\lambda^t x, v - J_\lambda^t x), \quad \forall v \in H,$$

が成立することに注意する.

まず, $v_0 \in D(\varphi^0)$ を固定し, (3.2) を満たす関数 v を選ぶ. (3.14)

において, $v = v(t)$ とおけば,

$$(3.16) \quad \varphi_\lambda^t(x) \leq M_0 + \frac{1}{2\lambda} (\|x\| + r_0)^2, \quad \forall t \in [0, T]$$

を得る. 他方, (3.15) で $v = v(t)$ とおけば, 次を得る.

$$M_0 - \varphi^t(J_\lambda^t x) \geq \lambda^{-1} \{ \|J_\lambda^t x\|^2 - \|J_\lambda^t x\|(\|x\| + r_0) - r_0 \|x\| \}.$$

従って, (3.1) を利用すれば, (3.12) を得る. \therefore z , $r = \sup\{\|J_\lambda^t x\|;$

$0 < \lambda \leq 1, 0 \leq t \leq T\} (< \infty)$ とおけば, $s \in [0, T]$ に対して $J_\lambda^s x \in D(\varphi^s)$ である

から, 仮定 A より, 次を満たす $\hat{v}_s: [0, T] \rightarrow H$ が存在する.

$$\|\hat{v}_s(t) - J_\lambda^s x\| \leq |g_r(t) - g_r(s)| (\varphi^s(J_\lambda^s x) + K_r)^{\frac{1}{2}}, \quad 0 \leq t \leq T.$$

$$\varphi^t(\widehat{v}_s(t)) \leq \varphi^s(J_\lambda^s x) + |h_r(t) - h_r(s)|(\varphi^s(J_\lambda^s x) + K_r), \quad 0 \leq t \leq T.$$

従って、再び (3.15) にあいて、 $v = \widehat{v}_s(t)$ とおけば、

$$\begin{aligned} & |h_r(t) - h_r(s)|(\varphi_\lambda^s(x) + K_r) + \varphi^s(J_\lambda^s x) - \varphi^t(J_\lambda^t x) \\ (3.17) \quad & \geq \lambda^{-1}(x - J_\lambda^t x, J_\lambda^s x - J_\lambda^t x) - |g_r(t) - g_r(s)| \|\partial \varphi_\lambda^t(x)\| (\varphi_\lambda^s(x) + K_r)^{\frac{1}{2}} \end{aligned}$$

を得る。同様にして、 s と t を入れ換えた不等式も成立するから、これらを加えることによって、

$$\begin{aligned} \lambda^{-1} \|J_\lambda^t x - J_\lambda^s x\|^2 & \leq |h_r(t) - h_r(s)|(\varphi_\lambda^t(x) + \varphi_\lambda^s(x) + 2K_r) \\ & \quad + |g_r(t) - g_r(s)| \{ \|\partial \varphi_\lambda^t(x)\| (\varphi_\lambda^s(x) + K_r)^{\frac{1}{2}} + \|\partial \varphi_\lambda^s(x)\| (\varphi_\lambda^t(x) + K_r)^{\frac{1}{2}} \} \end{aligned}$$

を得、(3.16) に注意すれば、 $J_\lambda^t x$ は t について強連続であることがわかる。さらに、

$$\lambda^{-1}(x - J_\lambda^t x, J_\lambda^s x - J_\lambda^t x) \geq (2\lambda)^{-1}(\|x - J_\lambda^t x\|^2 - \|x - J_\lambda^s x\|^2)$$

に注意すれば、(2.2) と (3.17) より、

$$\begin{aligned} & |h_r(t) - h_r(s)|(\varphi_\lambda^s(x) + K_r) + |g_r(t) - g_r(s)| \|\partial \varphi_\lambda^t(x)\| (\varphi_\lambda^s(x) + K_r)^{\frac{1}{2}} \\ & \geq \varphi_\lambda^t(x) - \varphi_\lambda^s(x) \end{aligned}$$

を得る。又、上の不等式は、 s と t を入れ換えても成立するから (3.13) が得られ、同時に、 $\varphi_\lambda^t(x)$ の t に関する絶対連続性も導かれる。(証明終)

系 $u: [0, T] \rightarrow H$ を強絶対連続な関数とする。このとき、仮定 A の下で、各 $0 < \lambda \leq 1$ に対して、 $\varphi_\lambda^t(u(t))$ は $[0, T]$ 上絶対連続かつ、a.e. $t \in [0, T]$ で

$$\begin{aligned}
 (3.18) \quad & \left| \frac{d}{dt} \varphi_{\lambda}^t(u(t)) - (\partial \varphi_{\lambda}^t(u(t)), \frac{d}{dt} u(t)) \right| \\
 & \leq |h_r'(t)| (\varphi_{\lambda}^t(u(t)) + K_r) + |g_r'(t)| \|\partial \varphi_{\lambda}^t(u(t))\| (\varphi_{\lambda}^t(u(t)) + K_r)^{\frac{1}{2}}
 \end{aligned}$$

が成立する. 但し, $r = \sup \{ \|\mathcal{J}_{\lambda}^t u(s)\|; 0 < \lambda \leq 1, 0 \leq s, t \leq T \}$.

[証明] (3.12) より $r < \infty$ であることを注意して, (2.4), (3.13) を利用すれば, 系の主張を得る. (証明終)

注意 仮定 A の下で, 補題 3.3 が成立するから, 我々の仮定は, ある意味では, Attouch-Benilan-Damlamian-Picard [1] の結果に対する一つの十分条件を与える, と考えることができる.

§4. 定理の証明.

$\{\varphi^t\}_{0 \leq t \leq T}$ は仮定 A を満たし, $f \in L^2(0, T; H)$, $a \in \overline{D(\varphi^0)}$ とする. さらに, $\varphi^0(a) \geq 0$ としても一般性を失わない.

(E) の強い解を構成するため, $\partial \varphi^t$ の Yosida 近似 $\partial \varphi_{\lambda}^t = \lambda^{-1}(I - \mathcal{J}_{\lambda}^t)$ ($\lambda > 0$) を利用して, 次の近似方程式を考える.

$$(4.1) \quad \begin{cases} \frac{d}{dt} u_{\lambda}(t) + \partial \varphi_{\lambda}^t(u_{\lambda}(t)) = f(t), & 0 \leq t \leq T, \\ u_{\lambda}(0) = a. \end{cases}$$

補題 3.3 に注意すれば, (4.1) の強い解 u_{λ} が一意に存在して, u_{λ} は $[0, T]$ 上 強絶対連続であることがわかる. さらに, u_{λ} に関して次の評価が成立する.

補題 4.1. $0 < \lambda \leq 1$ に対する (4.1) の強い解を u_λ とすると,

- (i) $\sup \{ \|u_\lambda(t)\| : 0 < \lambda \leq 1, 0 \leq t \leq T \} \leq M_1(\|a\|).$
- (ii) $\sup \{ \int_0^t \varphi_\lambda^S(u_\lambda(s)) ds : 0 < \lambda \leq 1, 0 \leq t \leq T \} \leq M_2(\|a\|).$
- (iii) $\sup \{ t \varphi_\lambda^t(u_\lambda(t)) : 0 < \lambda \leq 1, 0 \leq t \leq T \} \leq M_3(\|a\|).$
- (iv) $\sup \{ \int_0^T s \|\frac{d}{ds} u_\lambda(s)\|^2 ds : 0 < \lambda \leq 1 \} \leq M_5(\|a\|).$

特に, $a \in D(\varphi^0)$ ならば,

- (v) $\sup \{ \varphi_\lambda^t(u_\lambda(t)) : 0 < \lambda \leq 1, 0 \leq t \leq T \} \leq M_5(\varphi^0(a)).$
- (vi) $\sup \{ \int_0^T s \|\frac{d}{ds} u_\lambda(s)\|^2 ds : 0 < \lambda \leq 1 \} \leq M_6(\varphi^0(a)).$

但し, $M_i(\alpha) (i=1, \dots, 6)$ は α に連続的に依存する正定数である.

[証明] 補題 3.2 の正数 δ に対して, $m < T/\delta \leq m+1$ を満たす整数 m をとり, $t_i = i\delta (i=0, 1, \dots, m)$, $t_{m+1} = T$ とおく. このとき, 補題 3.2 より, $0 \leq i \leq m$ に対して, 正数 r_0, M と, $[t_i, t_{i+1}]$ 上の強絶対連続関数 v_i を

$$\|v_i(t)\| \leq r_0, \quad \varphi^t(v_i(t)) \leq M, \quad \forall t \in [t_i, t_{i+1}]$$

を満たすように選べる. 従って, (4.1) より, a.e. $s \in [t_i, t_{i+1}]$ で,

$$(4.2) \quad \begin{aligned} \frac{1}{2} \frac{d}{ds} \|u_\lambda(s) - v_i(s)\|^2 &\leq (f(s) - v_i'(s), u_\lambda(s) - v_i(s)) + \varphi_\lambda^S(v_i(s)) - \varphi_\lambda^S(u_\lambda(s)) \\ &\leq M + (\|f(s)\| + \|v_i'(s)\|)(\|u_\lambda(s) - v_i(s)\|) - \varphi_\lambda^S(u_\lambda(s)) \end{aligned}$$

を得る. 一方, (2.2), (3.1), (3.12) より, 適当な正数 C_4 をとれば,

$$(4.3) \quad -\varphi_\lambda^S(u_\lambda(s)) \leq -\varphi^S(J_\lambda^S u_\lambda(s)) \leq 2C_1 \|u_\lambda(s) - v_i(s)\| + C_4$$

が成立する. (4.3) に注意して, (4.2) を $[t_i, t]$ で積分すれば,

$$\|u_\lambda(t) - v_i(t)\| \leq \|u_\lambda(t_i) - v_i(t_i)\| + \sqrt{2(M+C_4)}\delta + \int_{t_i}^t (\|f(s)\| + \|v_i'(s)\| + 2C_1) ds$$

となることばかり, この評価式から, $0 < \lambda \leq 1, 0 \leq t \leq T$ で,

$$\begin{aligned} \|u_\lambda(t)\| &\leq \|a\| + (m+1)\{2t_0 + \sqrt{2(M+C_4)\delta}\} + \int_0^t (\|f(s)\| + 2C_1)ds \\ &\quad + \sum_{j=0}^m \int_{t_j}^{t_{j+1}} \|V_j'(s)\| ds \equiv M_1(\|a\|) \end{aligned}$$

が成立し, (i)を得る. この結果を利用して再び (4.2) を積分すれば, 評価式 (ii) も得られる.

次に (iii)–(vi) を示すために, 評価式 (i) と (3.12) より, $r \equiv \sup\{\|J_\lambda^t u(s)\|; 0 < \lambda \leq 1, 0 \leq t \leq T\} < \infty$ であることを注意する. 一方, (4.1) の両辺に du_λ/dt を掛ければ,

$$(4.4) \quad \left\| \frac{d}{ds} u_\lambda(s) \right\|^2 + (\partial \varphi_\lambda^s(u_\lambda(s)), \frac{d}{ds} u_\lambda(s)) = (f(s), \frac{d}{ds} u_\lambda(s)), \quad \text{a.e. } s \in [0, T]$$

を得る. 他方, u_λ は強絶対連続であるから, 補題 3.3 の系より

$$(4.5) \quad \begin{aligned} & \left| \frac{d}{ds} \varphi_\lambda^s(u_\lambda(s)) - (\partial \varphi_\lambda^s(u_\lambda(s)), \frac{d}{ds} u_\lambda(s)) \right| \\ & \leq |h_r'(s)| (\varphi_\lambda^s(u_\lambda(s)) + K_r) + |g_r'(s)| \|\partial \varphi_\lambda^s(u_\lambda(s))\| (\varphi_\lambda^s(u_\lambda(s)) + K_r)^{\frac{1}{2}} \end{aligned}$$

が a.e. $s \in [0, T]$ で成立する. よって (4.4), (4.5) を組合せれば,

$$(4.6) \quad \frac{1}{2} \left\| \frac{d}{ds} u_\lambda(s) \right\|^2 + \frac{d}{ds} \varphi_\lambda^s(u_\lambda(s)) \leq k_1(s) \varphi_\lambda^s(u_\lambda(s)) + k_2(s), \quad \text{a.e. } s \in [0, T].$$

但し, k_1, k_2 は λ に無関係な $[0, T]$ 上の可積分関数.

便宜上, (v), (vi) を最初に証明しよう. $a \in D(\varphi^0)$ として, (4.6) を $[0, T]$ で積分すれば,

$$\begin{aligned} \frac{1}{2} \int_0^t \left\| \frac{d}{ds} u_\lambda(s) \right\|^2 ds + \varphi_\lambda^t(u_\lambda(t)) &\leq \varphi^0(a) + \int_0^t k_1(s) \varphi_\lambda^s(u_\lambda(s)) ds + \int_0^t k_2(s) ds \\ &\leq \left(\varphi^0(a) + \int_0^T k_2(s) ds \right) \exp \left(\int_0^t k_1(s) ds \right). \end{aligned}$$

よって, (4.3) に注意して, (v), (vi) の評価式を得る. 最後に, (iii),

(iv) も, (4.6) の両辺を S 倍して積分すれば, 成立する. (証明終)

[定理の証明] 補題 4.1 が成立するから, u_n が (E) の求める強い解に収束することは, $\partial \varphi^c$ の単調性を用いて通常の方法によって示すことができる. 詳しい証明は, [2], [13], [14] 等を参照していただきたい.

§5. 応用.

Q を $R^n \times (0, T)$ の有界領域, $Q_s = Q \cap \{t=s\}$, $\Gamma_s = \partial Q \cap \{t=s\}$ ($\partial Q = Q$ の境界, $0 < s < T$), $\Gamma = \bigcup_{0 < s < T} \Gamma_s$ とおき, 次の非線型問題を考える.

$$(5.1) \quad \begin{cases} \frac{\partial u}{\partial t} - \sum_{i=1}^n \frac{\partial}{\partial x_i} (|\frac{\partial u}{\partial x_i}|^{p-2} \frac{\partial u}{\partial x_i}) = f & \text{on } Q \\ u = 0 & \text{on } \Gamma \\ u(x, 0) = u_0(x) & \text{on } Q_0 \end{cases}$$

但し, $p \geq 2$. Q の滑らかさに関しては, 議論を簡単にするため, 各 $t \in [0, T]$ について, Q_t の境界 ∂Q_t は十分滑らかであり, Q から $Q_0 \times (0, T)$ 上への境界までこめて C^2 -級の微分同型写像

$$(x, t) \longmapsto (\xi = X(x, t), \tau = t)$$

が存在するとする.

定理を適用するために, $Q \subset \hat{Q} \times (0, T)$ を満たす R^n の球 \hat{Q} をとり, $H = L^2(\hat{Q})$ 上で上の問題を考える. $C([0, T]; L^2(Q_t)) \equiv \{u \in$

$C([0, T]; L^2(\hat{Q})) : u(t) \in L^2(Q_t), 0 \leq t \leq T$ 等の記号を用いることにすれば, (5.1) に関して次の結果を得る.

命題 5.1. $f \in L^2(Q), u_0 \in L^2(Q_0)$ とする. このとき, (5.1) の解 u で, $u \in C([0, T]; L^2(Q_t)) \cap L^p(0, T; W_0^{1,p}(Q_t)), t^{\frac{1}{p}} \frac{du}{dt} \in L^2(Q)$ を満たすものが一意に存在する. 特に, $u_0 \in W_0^{1,p}(Q_0)$ とすれば, $\frac{du}{dt} \in L^2(Q)$ である.

[証明] $H = L^2(\hat{Q})$ 上の下半連続な凸関数 φ^t を

$$\varphi^t(u) = \begin{cases} \frac{1}{p} \int_{Q_t} \sum_{i=1}^n \left| \frac{\partial u}{\partial x_i} \right|^p dx & \text{if } u \in W_0^{1,p}(Q_t) \\ +\infty & \text{otherwise} \end{cases}$$

によって定義すれば, (5.1) は (E) の形に表わされる (cf. [14])

φ^t が仮定 A を満たすことをみよう. 任意の $t_0 \in [0, T]$ をとり, 固定する. このとき, 各 $v_0 \in D(\varphi^{t_0}) = W_0^{1,p}(Q_{t_0})$ に対して,

$$v(x, t) = \begin{cases} v_0(X^{-1}(x(x, t), t_0)) & \text{if } x \in Q_t \\ 0 & \text{if } x \in \hat{Q} - Q_t \end{cases}$$

とおけば, 適当な正定数 C をとることによって

$$\|v(\cdot, t) - v(\cdot, t_0)\|_{L^2(\hat{Q})} \leq C |t - t_0| \varphi^{t_0}(v_0)^{\frac{1}{p}}, \quad \forall t \in [0, T],$$

$$\varphi^t(v(\cdot, t)) \leq \varphi^{t_0}(v_0) + C |t - t_0| \varphi^{t_0}(v_0), \quad \forall t \in [0, T],$$

が成立する. よって, φ^t は仮定 A を満足するから, 定理を適用して命題の主張を得る. (証明終)

注意. Fujita [7] によって取り扱われた形の, non-cylindrical な

領域における非線型熱方程式に対しても、我々の定理は変数変換の必要なく適用できる。(cf. [2])

文 献

- [1] H. Attouch - P. Bénéilan - A. Damlamian - C. Picard, Équations d'évolution avec condition unilatérale, C. R. Acad. Sc. Paris 279 (1974), 607-609.
- [2] H. Attouch - A. Damlamian, Problèmes d'évolution dans les Hilberts et application, J. Math. pures et appl. 54 (1975), 53-74.
- [3] M. Biroli, Sur la solution faible du problème de Cauchy pour des inéquations d'évolution avec convexe dépendant du temps, C. R. Acad. Sc. Paris 280 (1975), 1209-1212.
- [4] H. Brézis, Propriétés régularisantes de certains semi-groupes non linéaires, Israel J. Math. 9 (1971), 513-534.
- [5] H. Brézis, Un problème d'évolution avec contraintes unilatérales dépendant du temps, C. R. Acad. Sc. Paris 274 (1972), 310-312.
- [6] H. Brézis, Opérateurs maximaux monotones et semi-groupes de contractions dans les espaces de Hilbert, North-Holland (1973).
- [7] H. Fujita, The penalty method and some nonlinear initial value problems, Contributions to Nonlinear Functional Analysis, ed. by E. Zarantonello, Academic Press (1971).

- [8] N. Kenmochi, Some nonlinear parabolic variational inequalities, to appear in Israel J. Math.
- [9] N. Kenmochi - T. Nagai, Weak solutions for certain nonlinear time-dependent parabolic variational inequalities, Hiroshima Math. J. 5 (1975), 525 - 535.
- [10] K. Maruo, On some evolution equations of subdifferential operators, Proc. Japan Acad. 51 (1975), 304 - 307.
- [11] J. Moreau, Problème d'évolution associé à un convexe mobile d'un espace hilbertien, C. R. Acad. Sc. Paris 276 (1973), 791 - 794.
- [12] J. Péralba, Un problème d'évolution relatif à un opérateur sous-différentiel dépendant du temps, C. R. Acad. Sc. Paris 275 (1972), 93 - 96.
- [13] J. Watanabe, On certain nonlinear evolution equations, J. Math. Soc. Japan 25 (1973), 446 - 463.
- [14] Y. Yamada, On evolution equations of subdifferential operators, (J. Fac. Sci. Univ. Tokyo に投稿中)